

娥眉山下橋木柱と韓国の長柱について

韓 泰 植（普光）

今から5年前である1990年8月に日中友好漢詩協会によって良寛の「題娥眉山下橋杭」という詩碑を娥眉山麓に立てることををてがけておられた。この詩は良寛が68歳（1825）の冬、越後宮川浜に「娥眉山下喬」という篆刻のある橋杭が漂着したことを聞いて歌ったものである。

ところで、この物は韓国の長柱と同じの形なので、いくつかの疑問点を持つようになった。一つはこの木柱が果して中国産であろうか。二つは韓半島には娥眉山がないのであろうか。三つは中国の娥眉山より新潟まで6000キロもあり、特に黄海を逆流することができるのであろうか。そして、これらの点が解明されるならば、この橋杭とおもわれでたのが、実は長柱であり、その故郷は韓半島ではなかろうかということである。

さて、これについて1842年に鈴木牧之によって編撰された『北越雪譜』2編巻4の「娥眉山下橋柱」（岡田武松校訂・岩波文庫）に記録されている。

文政八年乙酉十二月、苅羽郡越後椎谷の漁人椎谷は堀候の御封内なりある日椎谷の海上漁して一木の流れ漂ふを見て薪にせばやとて拾ひ取て家にかへり、水を乾されとて庇に立寄おきしを、椎谷の好事家通りかかり、是を見てただならぬ木とおもひ熟視に、娥眉山下喬といふ五大字刻しありしをもってかの国の物とおもひ、漁人には薪を与へて乞ひうけるとぞ。さて余が旧友観励上人は椎谷ざい田沢村浄土宗祐光寺強学の聞えあり、嘗て好事の癖あるを以てかの橋柱の文字を双鉤刊刻して同好におくり且橋柱におくり且橋柱に題する吟詠をこひ、是も又梓にして世に布んとせられしが、故ありてはまた不果。かの橋柱は後に御領主の御蔵となりしとぞ。椎谷は余が同国なれども幾里を隔たれば其真物を不見、今に遺憾とす。姑伝写の図を以てここに載つ。

と記して「娥眉山下橋柱」の拾得過程とその後の移転について述べている。文政8年（1825）に日本の新潟椎谷の浜で漁夫によって発見された橋柱はただ薪木のものであったが、識者の目に見つけて珍貴なものになったのである。特に識者達の関心事はそこに刻っている「娥眉山下喬」という五大文字である。これは当時の日本知識層の中では広く知られている中国の娥眉山と聯想することができたの

である。そして、この文字を雙釣（字書の中を白くし輪郭だけを写すこと）にほって知識人達におくり、橋柱に題する感想を詩歌で求めたのである。このことは大評判となり、識者達の関心を集中するようになったのである。したがって、この物は権力者である領主の所蔵品になった。鈴木牧之（1770～1842）は天保7年（1836）8月に中風によって身体の不自由になったので越後の塩沢（今日の新潟県南魚沼郡塩沢町）から椎谷までは同国としてあまり遠くなかったが、残念ながら真物を見ることはできなかった。そして彼はその物の伝写の図のみ載ることになった。天保12年（1841）11月に『北越雪譜』二編の四巻まで発売されたが、その翌年（1842）5月15日に73歳の生涯を終ったのである。

しかし、彼の友人であり当代の文士である百樹（山東京山）のコメントはもっと詳しく説明している。百樹は鈴木牧之の前文と橋柱の図の草稿を見て自分なりに五種の説明を補充している。

①橋柱の用途及び形について述べている。即ち、これは橋柱にあらず、道をおしえる里程標である標準という。このような標準は日本にもあるが、上の人面はなかったのである。この頭部の人面については詳しく述べていない。

②標準の拾得の過程について述べている。即ち、初めはただ好事家というが、ここでは西禅院の小僧によって唐詩選とむすびついて蛾眉山の文字を読まれ、そして、この標準も唐土の物であると記している。

③蛾眉山の説明と日本の椎谷までの流入経路について自分かつてに想像して詳しく述べながら、自分も信じられない不思議なことであると記している。

④蛾眉山の名前について蛾、娥の混用と喬字に関する問題点を述べている。

⑤その形を縮図して長さは一丈余り、周は二尺五寸余りと画ている。

この時期はまさしく江戸幕府の末期で日本は鎖国の状態であり、外国とは一切門戸を閉ざしていた。その時、椎谷浜に蛾眉山下橋という文字のある橋杭が流入をされたのは大きなニュースであったはずである。特に当時の知識人の間には『唐詩選』に収められている李白の「蛾眉山月歌」がよく知られていた。即ち、

蛾眉山月半輪秋	蛾眉山月、半輪の秋
影入平羌江水流	影は平羌江水に入りて流る
夜發清溪向三峽	夜、清溪を發して、三峽に向う
思君不見下渝州	君を思えども見えず、渝州に下る。

李白の詩によって日本では蛾眉山を憧憬する夢をもっていたわけである。また、佛教徒にとっては五台の文殊、九華の地藏、普陀洛迦の観音とともに蛾眉山

は普賢菩薩の霊場として四大聖地の一つである。そして、そこに巡礼するのが長い間の夢でもあった。そうした信仰と李白の詩とかさなって蛾眉山はたれもが一度はいきたいところであった。しかし、鎖国政策によって外国にいくことが出来なかった日本人としては「蛾眉山下橋」の漂流は普賢菩薩及び李白との出会いとも思われ、感動されて、その標準の話は広く知られるようになった。

そこで彼らは少しも疑わず、これを中国の蛾眉山と決めて詩を作り、その漂流経路までもかってに説明したのであった。そして、このような話が68歳頃の良寛（1758～1831）の耳に入ったので、彼も関心を見せた。良寛がこの実物を見たのかは知らないが、彼はこれについて「題蛾眉山下橋杭」という詩を作っている。

不知落成何年代	知らず、落成は何の年代ぞ
書法遒美且清新	書法は遒美、且つ清新なり。
分明我眉山下橋	分明なり、我眉山下の橋
流寄日本宮川濱	流れ寄る日本、宮川の浜

良寛の自筆本であるが、『良寛道人遺稿』では第二句の遒美が温雅となっており、第四句の宮川が椎谷になっている。また、詩題も虫へんの蛾眉であるが、本文では我眉であり、刊本は山へんの蛾眉であり、長柱では女へんの蛾眉である。

とにかく、良寛もこの標準を中国の四川省の蛾眉山の物であると信じたのであり、その用途は橋杭であると思い、また、書法については強い関心を持っていたが、人面の彫刻についてはなんにも触れていない。彼の心には蛾眉山と李白を結びつけて考え、日本でこの蛾眉山下橋を見るのは李白との出会のように感じられたのかも知らない。

しかし、この蛾眉山下橋の木柱が果して中国の物であるかということについては早くから疑問を提起している人もある。鈴木寿太郎は『東京人類学会雑誌』48号（1890年3月）に「朝鮮の人面を彫る木標に関して」という論文で朝鮮では人面を彫る張木、張承があると述べている。また、同誌65号（1891年8月）で羽柴雄輔は「朝鮮里程標に就き」という論文で張承の形及び彫る文字について述べている。このような研究を進めるうちに中国でも人面を彫る木標があるのかという疑問を持って調べることになった。即ち、同誌69号（1891年12月）に羽柴は「朝鮮里程標に就き」という論文で彼の文献資料の調査と友人である井上陳政の中国現地の旅行及び踏査の途中にもそのようなものが目に触れなかったと述べている。したがって中国では「蛾眉山下橋」のような頭部に人面を刻る木柱はないので、これは明らかに中国産ではなく、韓国の長柱の一つであることがわかるのである。

韓国における長性の歴史は古代より始まる。記録上の最古のものは884年に建立された宝林寺普照禪師碑(朝鮮金石総覧巻上63頁)である。これによれば、

表徳以法力 施于有政 是以 乾元二年 特教植長生標柱 至今存焉

と記している。即ち、元表大徳は法力があり、彼は王の政治を助けたので、景德王の乾元2年(759, 王18年)に特命によって長生標の柱が建立されたが、その標柱が今(884年)まで存置していると記録されている。これが韓国の長性に関する最古の文献であり、その後のものとしては雲門山禪院長生、通度寺裨補長生標、国長生、道岬寺長生、安岳燃燈寺長生標などがある。したがって、長生の起源は寺院より始まっており、その語葉は宋道誠が1019年に編した『釈氏要覧』巻下雜記(大正蔵54, 304b)の「寺院長生錢 律云無盡財 盡子母展轉 無盡故」というところから引用されているとして長生庫と関連させる人もあるが、これは宝林寺普照碑より年も後のことである。したがって、韓半島で新羅時代の8世紀までの資料が残っている。

しかし、長性が多くつくられたのは、15世紀以後の朝鮮時代であり、その材料も木、石などが使用され多様化された。

また、その名前も埃, 法首, 長生, 長丞, 長承, 長性, 長城, 長善, 長性, などいろいろな呼ばれた。特に長性の「性」字は韓半島で造られた文字である。これに関する初めての出典は徐居正(1420~1488)の『太平閑話滑稽伝』巻2(1482年刊)「路傍長性」である。「有一朝官出守外郡嘗乘醉見路傍長柱…」即ち、路傍長性は官路の里程標としての役割していることを示している。その発音はチャンソン, chang-seung と読む。したがって長性は韓半島のみあるものである。

それでも長性は寺院より、始まり法首は道教の神仙思想によって出来たが、朝鮮時代以後はこの二つが混用されて区別なしに長性と称されるようになった。

その機能は多様であり、人面の形や銘文にも差がある。それについて金斗河の『法首と長性』(集文堂, 1990)によれば、つぎのようである。

①部落守護のためは凶年, 災殃, 流行病, 防疫などの辟邪進慶の信仰である。銘文は天下大將軍, 地下女將軍, 上(下)元周將軍, 鎮西大將軍, 防禦大將軍, 振威大將軍, など種々の名がつかられる。また防疫の機能をもっている娥眉山下橋の木柱もこのような類形であるが、これについては後に詳しく述べる。

②方位守護のためには五方に神將を配置してその方位を守る。即ち、銘文は東方青帝逐鬼大將軍, 五方逐鬼大將軍(夫人)などである。

③山川裨補は風水地理説によって国家の安寧と王の無病長寿を祈るために寺院

の近くに立てる。特徴は人面がないのである。銘文は長生標、国長生である。

④ 邑落裨補のためには陰陽五行説による村の地型の短点を補完している。銘文は以鎮地脈、蝸柱成仙、静界大將軍などであり、材料は石長柱が多い。

⑤ 佛法守護の機能には寺院の清浄と尊厳性及び辟邪進慶するため寺の入口に立てられる。この銘文は上元周將軍、下元唐將軍、擁護金沙逐鬼將軍、放生定界、護法大將軍、伽藍善神などである。

⑥ 境界標、禁標の機能としては寺院の土地及び行政区域の境界標及び寺院の聖域における漁・狩猟を禁止するために立てられる。銘文は奉恩寺柴場、燃燈寺の四方石積長生標、月精寺の禁獵標などである。

⑦ 路標のためには里程標、官路、駅、院宇、位置、地名、山名、橋名などの名をしるし並びに防痘の為に路神をも兼ねている。銘文は某府東距幾里地名某、縣東距二十里地名紅、小埃十里、大埃三十里などである。

⑧ 城門守護の機能としては他国、外地より侵入する疫病及び災殃などを城門、洞口で防止するために立てられる。銘文は南正重、火正黎、鎮西大將軍、濟州道のトルハロパンなどである。

⑨ 祈子のためには得男と豊饒を祈る。銘文は無く、男根石などもある。

以上のように韓国における長柱の機能と銘文、形態などについて述べたが、この分類はあくまで便利上の区分である。もとは共に混合されており、民衆によって奉られた民俗信仰であり、また、長い変遷を経て今日は韓国を象徴するシンボルとされている。

然れば、なぜ、一般的な銘文を書かなく、娥眉山下橋と彫ったのであろうか。また韓半島では峨眉山があるのか。このような疑問を持って韓半島で峨眉山という地名を調査したことがある。15世紀には1個所が見えているが、17、18世紀頃には110個所もあらわれている。

ところで、このころ全国的に峨眉山が増えている原因としては防痘と密接な関係がある。したがって韓半島の峨眉山信仰についてもすこし詳しく述べてみたい。

韓国では痘瘡を天然痘という、中国の楊子江の南にある胡鬼によって罹る病気であると信じられている。伝染性が強いこの病気の治療方法はなかったのである。記録によれば、この病気に罹った15～20%人々のが死んだといわれている。

このような状況で峨眉山信仰が出てくる。1742年に呉謙撰である『医宗金鑑』の「四診要訣」巻一によれば、種痘^{しゅとう}について次のような記録がある。

古有種痘 法起自江右達於京幾立其所源云自宋眞宗時 峨眉山有神人出為丞相王旦之子

種痘而愈遂伝于世 其説雖似渺茫 然以理揆之實有參贊化育之功……此誠去險履平辟危就安之良法也

と記されている。即ち、宋の真宗（998～1022）時に丞相王旦（?～1017）の子が痘瘡に罹ったが、峨眉山神人の助けによって治療することが出来たと言う。その神人の教えは信じがたい所もあるが、その効果はあったのであると述べている。しかし、ここではその方法について詳しく述べていないが、1831年に印燭著である『引痘略』の呉珍儒の序文によれば、もっと詳しく説明している。

濟世之道莫先於醫 醫症之多莫險於痘 稽種痘之説上古末有 自漢代伏波將軍征武陵蠻從壺口進兵軍中遂染 此疾厥後班師毒氣伝入中国 諸醫調治 皆據内經痛癢瘡瘍屬心火之一 言為治痘之要領十損八九乃至 宋仁宗時 丞相王旦初生諸子俱死於痘 後老年生一子名素 欲為出痘招集天下諸醫 有能深明治痘之法及著書究説者重金酬謝 諸醫皆言不敢深明於痘 川人聞其求醫 甚愚乃為延諸天姥仙娘現身説法 取痘苗架於鼻孔旬日之外告厥成功 嗣是相伝三橋善女痘症日漸通行然 惑有感天氣而発者有取苗吹入鼻孔 而発者順則治 逆則難……

と記している。古代の中国では種痘がなかったが、漢代に南方出征の軍人によって伝染されて被害が多かった。宋代の王旦が息子の治療のために種々の方法を求めたが、医者達は治痘することができなかった。ところで、身を現わして説法する天姥仙娘の教えによって治療することができた。その方法は患者のかさぶたである痘苗を人の鼻孔に挿入すれば、10日後は軽い病気に罹かるが、治療することができる。その方法は三橋善女に伝受されて種痘を防止したが、たまに難しい時もあったと述べている。

したがって、上記の『医宗金鑑』の説と総合すれば、峨眉山の神人である天姥仙娘の教えによって痘瘡の治療法は開発されており、それは三橋善女に伝受されたことである。即ち、防疫法は峨眉山を中心にして始められたことである。この峨眉山は普賢菩薩の霊場であるので、普賢信仰との関連性があるのではなかろうかと思う。即ち、天姥仙娘、あるいは三橋善女が普賢菩薩の現身であり、それが防疫長性の信仰として広められたのではなかろうか。

また、一つは防疫の方法がもっとも科学的なことである。このような方法は1796年英国の Jenner が発明した種痘法と似ており、その効果はあったのである。したがって18世紀世頃の防疫法の開発は東西洋が同じであるが、ただ、その接近方法論において東洋では神秘的信仰的に説明している。

このような、防疫法は朝鮮にも伝来され1800年に丁若鏞が撰した『麻科会通』

巻末「種痘心法要旨」の種痘条では『医宗金鑑』の内容をそのまま引いている。また、李鍾仁が編撰した『時宗通編』巻57「痘瘡有神辨証説」によれば、

嘗聞張琰種痘新書 則欲痘時 先立神位像女人具衣裳以妥而祈禱而称痘神娘娘云 則乃沿峨帽種痘女冠而有此会也。我東則痘神曰胡鬼媽媽 又称客至嶺南称西神……

と記されている。即ち、中国の張琰の編著である『種痘新書』（1741刊）を引いて中国における防疫法として峨眉山女痘神像の信仰について述べている。女人神位像を立て衣服まで着させて痘神娘娘と称じながら祈るのである。このようなことが朝鮮にも信仰されていると記されている。

この峨眉山痘神信仰が広まったのは17, 18, 19世紀である。この時期は痘瘡の伝染と凶作によって人口が急に減っている。したがって、庶民達はひとたび痘瘡に罹れば治療方法がなく、信仰的に解結するために防疫長性に祈るのみであった。

痘瘡の被害が多い時に峨眉山という名前が急に多く出ており、一般的な山名も峨眉山に改名されている。『統経国大典』巻5 刑典禁制条（1746）によれば、

京城十里内（……北自大菩洞普賢峰猪噬峴峨眉山……）入葬者依盜園陵樹木律論

と記されている。ここで普賢峰猪噬峴峨眉山のことについて述べれば、話がさかのぼるが、四川省の峨眉山は普賢菩薩の霊場であるのでこの地名もなにか普賢信仰と関係があるのではなからうかとも思われる。

これらの以外にも大邱の峨眉山、釜山の峨山洞の峨帽山、江原道漣川郡帽山面峨帽里の峨帽山、長城の峨帽岩、黄海道の峨眉山、有名な普賢寺のある平安北道の妙香山も峨眉山と呼ばれた。また、王の宮殿である景福宮にも人工の峨眉山が作られた。特に王の寝殿であり、太子宮でもある交泰殿のうらに假山を造って峨眉山と呼んだのである。これはおそらく当時の痘瘡を防止するために痘神に祈る山であろう。この伝染病の防止は王室の大きな悩みであった。そして、王子達の安全を祈るために王宮の中心地に峨眉山という假山を造ったと思われる。したがって朝鮮において峨眉山防疫信仰は民間のみならず、王室に至るまで広く信仰された。その手がかりは防疫長性信仰である。これは古代の長性信仰と習合されて峨眉山防疫長性となり、痘瘡の伝染に治療方法を知らなかった人びとは防疫長性信仰に依存していたのである。特にこの峨眉山信仰は儒教の文士である知識人達には李白の「峨眉山月歌」によって詩心の憧憬の対象であるので、よく知られたのである。また、佛教人には中国の四大聖地の中に普賢菩薩の霊場として信仰の対象でもあった。そして、この峨眉山の防疫長性信仰は急に広くなり、村の入口にある長性は防疫長性の役割も持つようになったのである。この信仰は痘瘡が全

国的に拡散する時にもっと広がったのである。

それでは、新潟県椎谷に漂流した長柱の本拠はところであろうか。前記の鈴木『北越雪譜』では中国の四川省の峨眉山と記しているが、これは論理的にも納得できないことである。即ち、距離も6000キロでもあり、また、揚子江を経て東シナ海まで出ても海の流れによって黄海の山東半島のほうへいくのが一般的である。ところが、海の流れとは関係なしに玄海灘を経て東海の新潟まで漂流したことは想像しがたいことである。

それで、そのルートを韓半島で探すならば、金剛山と雪岳山のある江原道のほうがもっと近いと言える。そこ一帯の川が流れこむ海流は新潟方面まで流れており、緯度も北緯38°線である。また、江原道にも峨眉山が数箇所ほどあり、長柱も多くあるので、その峨眉山の近くに峨眉山橋があり、その名を冠した防痘長柱があったのが、夏の洪水によって流れたのではなかろうかと思うのである。

韓国では1824年7月に大雨があり、その被害が甚大であったと記録されている。そして、特に1820年頃には伝染病と痘瘡によって十万以上の人々が死亡しているのである。したがって民心が不安におののき、病気に苦しむ庶民達は民俗信仰である長柱に祈ったことであろう。特に災殃と痘瘡を防ぐ象徴である峨眉山長柱は村の人だちにとっては大きな帰依処であったものと思われる。

今、新潟県高柳町の貞観園に保存されている長柱は長さ八尺七寸余り、周囲は二尺九寸の巨木であり、そこに彫られている人面は韓国長柱の特徴あるユニークなそのものであり、「峨眉山下喬」の五字の中に最後の喬字は現在つかわれていない変字である。この長柱は韓国の江原道にあったものが、大雨によって流れて東海に入って文政8年（1825）12月椎谷の漁人に発見されたと思うのである。

一つ残念なことは良寛の時代は鎖国政策のために韓半島を思い浮べがたかったと思うが、今日においては韓日両国の交流が盛んであるにもかかわらず、いまだにこのものについて中国のものと信じ込んでいるということである。今でも長柱は韓国の村、学校、観光地などどこでも見られるものである。それなのに、いままでも知らずにいたというのはまだまだ日本人の心の中には韓国文化についての閉鎖性が脱けてないからではないかとしきりに思案するこの頃である。

〈キーワード〉 長柱、峨眉山下橋、防痘長柱信仰

（東国大学校副教授、文学博士）